

ACL 2003

今年の ACL (Annual meeting of Computational Linguistics, <http://www.ec-inc.co.jp/ACL2003/>) は、新緑まぶしい北海道で 7 月 7 日から 12 日にかけて行われた。ACL は計算言語学の国際会議としては最も権威があり、41 回目となる今回は初めての日本での開催となった。戦争やテロへの懸念、さらに SARS 騒ぎなどもあったが、会議には当初の予想をはるかに上回る 600 名以上の参加者が世界 30 カ国以上から集まった。会場となった札幌コンベンションセンターは今年 6 月にオープンしたばかりであり、他の国際会議・国内会議も複数同時に行われて大いなる賑わいを見せていた。

例年、ACL では本会議に加えて、多くのワークショップとカンファレンスが併設して行われている。今回は、初日に 4 つのチュートリアルと IRAL (International Workshop on Information Retrieval with Asian Languages)、2 日目以降に本会議が 3 つの平行セッションで行われた。さらに、その後 9 つの併設ワークショップと EMNLP (Empirical Methods in Natural Language Processing) が行われた。その他、本会議の期間中に学生ワークショップ、パネルセッション、そしてエキシビションが行われた。本会議では 71 本の論文が採択され、採択率は 19.72% であった。採択された論文のうち 32 本が北アメリカから、22 本がアジア・環太平洋から、そして 17 本がヨーロッパからであった。特筆すべきは日本人が第一著者の論文が昨年度の 4 本に対し 12 本に増加したことである。

今回の ACL では、機械翻訳・構文解析といった基本的な研究から情報抽出や質問応答といった昨今のインターネット上の文書を利用するための応用研究まで幅広く網羅されていた。全体の傾向としては、ここ数年の流れと同じく構文解析などで統計的手法を適用するといった内容が多く、依然として機械学習花盛りといった感があった。機械学習の手法そのものについては今回併設された EMNLP に場所を移して議論されることが多かったが、大半のセッションで機械学習を利用した研究が見受けられた。

近年の ACL では定量的な評価がされていることが論文採択の重要な指標となっているが、今回は定量的評価とともに言語的な素性をより考慮した方向に進もうとする姿勢が見られた。優秀論文賞を受賞した論文の 1 つ、Dan Klein らの "Accurate Unlexicalized Parsing" はすべての言語情報をひとくくりとして統計的手法で処理するという最近頻繁に見受けられる研究の傾向とは違



図 Break 風景

い、構文解析に必要な言語情報は何かを熟考したものである。もう 1 つの Yukiko Nakano らの "Towards a Model of Face-to-Face Grounding" は言語情報に対し実際の人間の行動がどう grounding (関連付け) されるかを熟慮したものである。統計的手法が成熟しつつある中で自然言語処理の研究は、言語から得られる素性情報は何か、そして本当に解析に「効く」言語素性は何かを探る流れにもう一度戻ってきたように筆者には感じられた。

新しい流れとして、ACL としては初の試みである企業と大学によるエキシビションの存在を挙げておきたい。自然言語処理が実用段階へ進み、ナレッジマネジメントやテキストマイニングの実現手段として注目を集めている今日、産学交流は不可欠である。大学のスタッフにとっては自分の研究の延長線上にどのような実用が待っているのかを知るいい機会であろうし、また企業にとっては長期的な研究開発の展望を行うための良い刺激となる。ただ 1 つ残念なのは、エキシビション参加者の大半が日本の大学・企業であったことである。今後回数を重ねることによってエキシビションがさらに発展し、産業界と学会の新しい交流の原点となることを期待したい。

理論と実践のバランスが取れていると定評のある ACL であるが、今年は言語学寄りの理論的研究はブダペストで行われた EACL (ACL の European Chapter) に集中したようだ。極東での開催ということもありヨーロッパからの参加者数は今ひとつであったようだが、昨年台湾で行われた COLING (International Conference on Computational Linguistics) に比べ参加者が 200 人以上も多かったという事実から、この学会は成功であったといえよう。

自然言語処理の分野で最も権威ある ACL が日本で開催されたことの意義はやはり大きかったと痛感してい

る。最後に、数々の問題を乗り越えて日本での開催に尽力された東京大学辻井潤一教授、北海道大学荒木健治教授にはこの場を借りてお礼を申し上げたい。なお、次回の ACL は 7 月にスペインのバルセロナで開催される。また、8 月には COLING もスイスのジュネーブで開かれる。来年の自然言語処理研究の発表の場はヨーロッパに移りさらなる盛り上がりを見せるであろう。

(村上明子/日本アイ・ピー・エム (株) 東京基礎研究所)